

マルハナバチ類

6月2日に保健所からの検査依頼です。市民の方から「変なハチがいる。」との相談が保健所にありました。担当者が現場調査を行い、標本を採集し、衛生公害研究所に運び込みました。後脚の跗（ふ）節第1節が幅広いこと、跗節第1節に大量の花粉を付けていたことなどからミツバチ科の種類と分かりました。さらに、腹部の先端3節だけに黄色毛があることからクロマルハナバチと鑑別し、保健所に成績書を送りました。ところが、この「衛生動物だより」を書くために色々な図鑑や文献を読んでいると「日本動物大百科」（平凡社）の中の記述が目に残りました。「マルハナバチ類の中でコマルハナバチだけが、都会生活に適応し、建築物の透き間などで巣を作ることがある。」といった内容の記述です。保健所の現場調査を行った担当者からの話でも、巣の場所は、マンションの壁の透き間だったそうです。コマルハナバチであったのかもしれません。

マルハナバチ類の巣

3年前にハチ駆除業務の委託先からハチ類の巣を譲り受けた中にマルハナバチ類の巣がありました。花粉を固めて団子のようにになっています。巣の周りに白い繊維が見えます。これは、住宅に使う断熱材です。壁の透き間に巣をしていました。これも恐らくコマルハナバチの巣だったのでしょ

フレイム(温室)による栽培の利点、欠点

フレイムを使用して農作物を育てることがあります。フレイムの目的は、気候管理が大きな目的の一つです。また、ガラスやビニールを利用して、野外とフレイム内を遮断することで、多くの農業害虫、農業害獣の侵入を防ぐこともできます。しかし、同時に受粉の役割を担っている昆虫類の進人も妨害してしまいます。そこで、フレイム内に受粉の手助けをする昆虫を導入することで受粉させます。その一つがマルハナバチ類の仲間のセイヨウオオマルハナバチです。

セイヨウオオマルハナバチ

6月中旬に妻の実家を訪れる機会がありました。実家では、トマトを栽培しています。収穫を手伝うためにフレイム内に入りました。フレイムの中にダンボール紙でできたセイヨウオオマルハナバチの巣箱が置いてありました。働き蜂は、ブーンブーンと独特の羽音を立てて、花から花へと慌しく飛び回っていました。そのおかげでしょうか、トマトは、たわわな実を付けていました。

こうしたセイヨウオオマルハナバチが受粉に利用できなかった場合では、フレイム栽培のトマトに受粉を促がすための植物成長剤を使っていました。作業が大変だったそうです。

また、実家ではイチゴもフレイムで育てています。受粉のためにミツバチを利用することもあったのですが、数度に渡ってミツバチに刺されたためにやめたそうです。その点、セイヨウオオマルハナバチは、攻撃性がなく、扱いやすいそうです。参考のために働き蜂を採集したかったのですが、1コロニーが3万円すると聞いて、採集することを断念しました。

特定外来生物

環境省の特定外来生物に関するホームページでは、トマトの受粉に利用するために年間7万コロニーのセイヨウオオマルハナバチを輸入していることが報告されています。その一部が野生化し、在来マルハナバチ類と競合し、生態系を破壊する可能性があることから、特定外来生物による生態系等に係る被害防止に関する法律において特定外来生物に指定されています。

